

後記

1996年7月に豊浜トンネル斜面崩壊と災害に関する調査結果の中間報告を「北海道地区自然災害科学資料センター報告 11号」として公表した。中間報告と言う以上、最終報告の公表は義務であった。とは言っても、開発局で組織された「事故調査委員会」がかなり詳しい報告書を9月に提出しており、我々の手でさらに詳しい解析を進めた最終報告が行えるのかは不安であった。

しかし、ここに研究分担者以外にも協力を得て最終報告書をまとめることが出来た。ご多忙にもかかわらず本報告集に寄稿された方々に厚く御礼を申し上げる。調査・研究期間が短いこともあって、やり残した実験や観察もあるが、それらは今後の課題としたい。また、本報告には不十分な点もあろうが、それは編集者の力不足のためである。皆様のご叱正をお願いする。

今回の事故について、私は、科学・技術の長足な進歩の中で「技術への過信」があった、とかつて寄稿（週刊金曜日、1996年3月29日号）したが、その過信は技術者だけの責任ではない。私自身、調査を進めてみて、地質学分野でも理解不足であったことを反省させられたし、関連分野の方からは特に学ぶことが多かった。あらためて、自然災害科学の研究が総合的に進んで行かなければならないことの重要性を痛感している。

地質班は第33回自然災害科学総合シンポジウム（長崎）で事故に関する見解を公けにした（箕浦ほか、1996）。ここで、敢えて付け加えるとすると、次の点であろう。豊浜トンネル古平側坑口右上部の崖には如何にも崩落しそうな岩体が見えている（写真、割れ目：矢印）。しかし、旧道の開設以来、無事故で今日に至っている。調査の結果は割れ目は内陸に伸びていることがわかったが、不安定とみえる岩体に私達は慣れ過ぎていたのではないか？

ところで、観察できる岩盤崩落と地震の予知を同列において岩盤崩落が予測できないと論ずるのは間違いである。今回は予知・予測は困難であったとはいえ、事故後に再発防止の種々の研究が進められている。研究を深め、再発を防ぐことが犠牲者に対してできる科学者の責任である。

なお、開発局から本年度の湧水量と気温、降水量の観測結果を見せていただいた。気温の上下と湧水量との間には相関があったが、あいにく、途中からヒーターの事故によって貯水層が凍結し、湧水量の詳しい観測は行えなかった。また、

本報告の出版には文部省科学研究費補助金のほか、北海道地区自然災害科学資料室のご援助を頂いた。以上記して、関係者に謝意を表す。（渡辺暉夫）

